濡れた仔馬のたてがみを

福元　忠一

父の平次は、無類の馬好きでした。明治生まれの小学校卒業で、色々な仕事を渡り歩いた末、一人前の大人になった頃には、鹿児島市内の豪商の米問屋に馬車引として雇われていたようです。

馬車の先頭には、もっとも体格のよい馬の手綱をとり、誇らしげな活躍振りを話してくれたものです。

フォークリフトの無かった昔のこと、桟橋での荷役作業は、肩に担いで米や砂糖・骨紛などを運ぶ仕事で、力自慢の他には取り柄がなかったからです。

入来で所帯を構え、小商売を始めて、最初に馬を手に入れたのがシマウマでした。縞馬、つまり、ゼブラではなく、トカラ馬です。

トカラ島があることも、トカラ馬がいることも、子供の私には新鮮な発見でした。

当然のごとく、トカラ馬の体型に相応しい大きさの馬車を特注しロバのパン屋さんならぬ、こんにゃく屋となり、家族を養ってくれました。

数年経ったのち、少しばかりの蓄えもできたのか、普通の馬を入手し、普通の馬車で稼ぎも増えて、人並みな暮らしもできたようでした。

ある日、学校から帰ってくると、厩には仔馬が入っています。やっと乳離れしたばかりとでもいえるようなかわいい栗毛の牡馬です。名前を「孝」とつけました。

鼻筋には、かねて父から聞いていた、品の良い馬の代名詞とされる、なんと、（流れ星の三白）です。

（流れ星の三白）とは、鼻筋に、白色の流れ星風の模様があり、そして、足首には三本の白色の足、つまり、（ホワイトソックス）です。

およそ動物の子は、犬であれ、猫であれ、はたまた豚であれ、可愛いに決まっているが、馬の子の可愛いときたら、別物で、嘶きのほか鳴き声など無いは等しいのに、驚きのしぐさなどに至っては説明の仕様はないものです。

すでに、餌をやったり、糞を始末したり、体を水で洗ってやるのも私の手伝いと決められていたころのこととて、楽しくて、学校から帰っても先ずは孝をみるものでした。およそ半年も経てば人間ならば少年の年頃となり、訓練が始まります。

先ず、轡をつけて手綱をつけますが最初は嫌がります。

慣れてきたら首を下げて轡をくわえてくれるぐらいに従順になり、愛情を感じたものです。

次には、背中に筵などをくくりつけ、鞍に慣れさせる訓練をします。馬車に慣れさせるにも順を追うて根気のいる作業が続きます。

「馬耳東風」などとありますが、風向きなど関係ない訳ではなく、常に聞き耳を立て、物音に敏感で、当然の本能です。

その一方で、私は遊ぶほうに夢中で、裸馬に乗るには、身長が足りないために、馬小屋の屋根から下に向かって飛び降りる方法をとり、驚かせたものです。

その裸馬で、野道を駆けたり、たまには、腕白な友達を乗せて、二人乗りをして遊んだこと、雨の後の濁った川を流れに逆らって孝

を泳がせたり、都会の子供には説明もできない奔放な少年でした。
学校で勉強をするなど、全然なかったように振り返っています。
孝は「濡れた仔馬のたてがみを」と歌の一節が出る幸せを与えてくれました。
鞍は、父が戦後の軍人の払い下げとかを探してきたらしく、貴重品扱いで、数回しか使わせてくれませんでした。
揃いの乗馬靴は私に大きすぎたが、拍車も着いており、もし、拍車をかけると孝にとっては、痛いだろうなどと、想像しました。
初夏のある日、大谷の山に薪の運搬に出かけました。馬車に満載の薪を積み、馬にはいたわりの気持ちで、乗らずに後ろを歩いて、緩やかではあるものの、でこぼこの下り坂が続きました。
谷のせせらぎの水は清く、鶯も深山の向こうからも澄み渡って聞こえていました。
この日の午後、事故は起きました。
孝が長さ五メートルほどの木の橋を渡り終え、あと少しのところで馬車だけが渡り終わろうとする頃に、みしみしっと橋が壊れる物音が始まったのです。
続いて、孝も後ろに引き落とされながら谷の水しぶきの中に土煙とともに落ちて行きました。
一瞬の出来事で、橋が腐っていたらしく、人も馬も手の出せる訳がありません。電話も無い時代で、自転車を借りてひとを呼び、孝を引き上げ、馬車で連れて帰る途中も痛そうな様子で、足を激しく動かしたり、涙を流しながら、一時間ほどで帰り着きました。
父の馬車引き仲間の清熊小父は、宮相撲の横綱で、そのうえ、弓取りも得意な、いつも柔和な顔の人で、孝の運搬を引き受けて貰っ

たようでした。

家に着いた頃には、小さな集落なのに聞きつけて、人だかりがしていました。

「んだもしたん」と、呟くおばちゃんたちのざわめきがありました。馬喰がいうには、怪我をした馬には、治療の方法はないことを知りました。

孝もこの先の運命を本能的に分かっているように感じられました。

父は険しい顔をして押し黙ったままで、家族みんなも同じでした。

やがて日も傾き、馬車は動きだし、大宮神社を過ぎるころ、清熊小父は、腰にぶら下げていた手ぬぐいを手に握り換え、杉の木立が隠れるあたりで見えぬ顔を使うらしい仕草が感じられました。

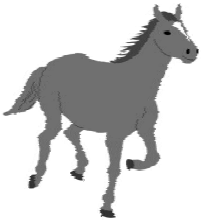
私は、裏庭に隠れて声を殺してすすり泣きました。

人間の年に教えたら十八歳にはなろうかと思われる年頃に、我が分身にも似た愛馬が悲しみの別れをいたしました。「濡れた仔馬のたてがみを」と、声には出なかったのです。

そして、前後して一家には不幸が続きました。

長兄が十八歳で戦病死、母が四十二歳で逝き、次兄も十八歳で病死、祖父母と続き、そのほかにもまだ続き、暗くて長い我慢の人生でした。

その後、父には、およそ三十年間、安穏な時が巡り、七十九歳で生涯を閉じました。

合掌

（元入来町長）